

日本民家園だより

第50号

平成14年7月31日

編集・発行 川崎市立日本民家園



人形浄瑠璃公演 (平成11年9月26日、「伽羅先代萩 政岡忠義の段」)

9月29日(日) 人形浄瑠璃公演

毎年、好評の小田原・下中座しもなかざ(国指定重要無形民俗文化財)による人形浄瑠璃公演。今年は9月29日(日)に開催します。

演目は「傾城阿波の鳴門けいせいあわなると 巡礼唄の段じゅんれいうた だん」。是非ご観覧ください。

(お申込み方法につきましては2ページをご覧ください。)

人形浄瑠璃公演

日本民家園では毎年、小田原の相模人形芝居下中座（国指定重要無形民俗文化財）を招いて人形浄瑠璃公演を開催しています。例年好評で定員を超すご応募をいただくこともあります。そこで昨年から同一内容で1日2回公演し、より多くの方々にご観覧いただけるようにいたしました。

今年の演目は「^{けいせいあわ}傾城阿波の鳴門 ^{じゅんれいうた}巡礼唄の段」。母親を探す娘のいじらしさと、娘と再会しながらも名乗ることができない母親の悲しみを描いた思わず涙を誘う名作です。舞台は、園内に移築・復原された国指定重要文化財の旧工藤家住宅です。素朴で重厚な柱や梁に囲まれた古民家内で演じられる人形浄瑠璃は、近代的な劇場とは違う、江戸時代の姿を想像させてくれます。

下中座の公演では、上演の前に人形浄瑠璃の人形のしくみや操り方^{あやつ}についての解説と人形にふれることができる体験コーナーがあります。重要無形民俗文化財の人形浄瑠璃に使われる貴重な人形を直に手にすることができる絶好の機会です。

観覧ご希望の方は下記の要項をご覧のうえお申込みください。お待ちしております。

人形浄瑠璃公演

^{けいせいあわ}「傾城阿波の鳴門 ^{じゅんれいうた}巡礼唄の段」(小田原・下中座)

平成14年9月29日(日)

①12:30～14:00

②14:30～16:00

各回とも上演前に約40分の人形解説・体験コーナーがあります。

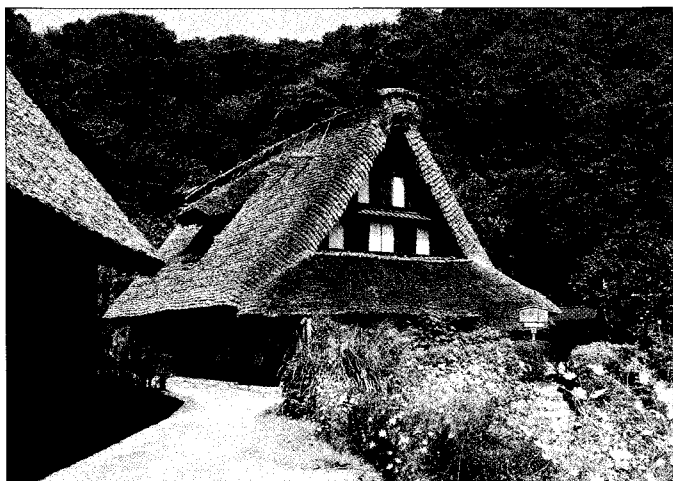
料金 500円(入園料別)

お申込み方法

9月1日(日)9:00から電話受付(定員:各回先着100名)

受付電話番号 044-922-2181

カラー絵葉書の新発売と民家園叢書購読のおすすめ!!



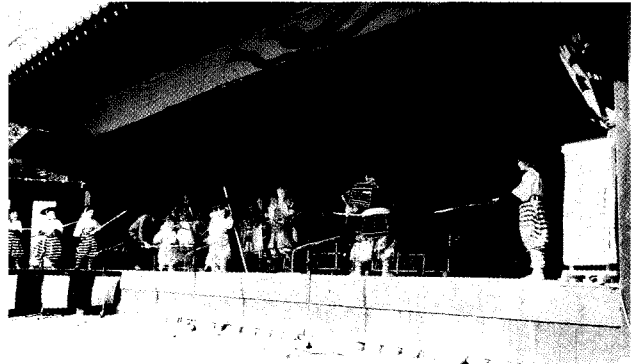
カラーの絵葉書を作ってほしいという多数のご要望にお応えし、4月1日から販売しております。ぜひお買い求めください。また民家園叢書1・2も好評発売中です。

- | | | |
|--------------|----|-------|
| ・カラー絵葉書(6種類) | 1枚 | 100円 |
| ・カラー絵葉書6枚セット | | 500円 |
| ・民家園叢書1 | | 1000円 |
| 日本古建築の特質 | | 関口欣也 |
| 日本の塔 | | 濱島正士 |
| ・民家園叢書2 | | 1000円 |
| 日本の仏堂 | | 鈴木嘉吉 |
| 桂離宮とその文化的背景 | | 斎藤英俊 |

農村歌舞伎公演記録 秋川歌舞伎あきる野座

5月12日(日)、船越の舞台（国指定重要有形民俗文化財）で農村歌舞伎公演が開催されました。秋川歌舞伎あきる野座（東京都指定無形民俗文化財）による公演は、民家園では2回目になります。もともと歌舞伎舞台である船越の舞台で農村歌舞伎の公演を行う機会を今後もできるだけ多くつくってまいります。

演目の絵本太功記は本能寺の変から光秀の死までの物語で、十段目の「尼ヶ崎閑居の場」は農村歌舞伎の定番で大変人気のある演目です。同じ絵本太功記の十三段目「山崎合戦の場」「小栗栖の場」は演じられることが稀な場面ですが、今回の秋川歌舞伎の公演は十三段目も演じられました。尼ヶ崎の閑居で武智十兵衛光秀があやまって母親を殺してしまう十段目に続き、十三段目では山崎合戦の大立ち回りと、落ちのびる途中で小栗栖あたりで農民に襲われ自害する光秀。物語に引き込まれる迫真の演技で感動的な公演でした。東京で唯一の農村歌舞伎を継承する秋川歌舞伎が、あきる野座として復活してから10年になり、ますます演技も実力をつけ発展してきました。



民家園ウォッチング ②

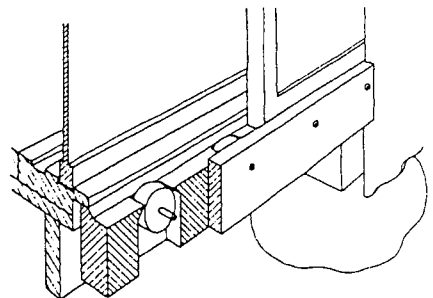
敷 居

民家の外から内へ、部屋から部屋へと入っていくためには、敷居という横木をまたがなければならない。民家においてよく設けられるその種別をあげると、中敷居・薄敷居・指し敷居・無目敷居などがある。

中敷居は、内法に上下2段の押入や戸棚を設ける時に用いる敷居である。この中敷居は横木同一材が敷居と鴨居を兼ねていることから、敷き鴨居ともいわれる。薄敷居は欄間の下などに設けた薄い横木、指し敷居は普通の敷居より高い横木、無目敷居は溝を掘らない敷居で、開き戸や開放のところにある横木である。用材としては松・桧・榎、高級なものとして桜・欒・カリン等が使われる。

日本民家園に移築復原した民家の敷居には、面白い装置がみられる。それは山形県から移築した旧菅原家住宅である。開閉頻度の高い敷居に「そろばん玉」と称する車を使った装置があると同時に、溝にたまったゴミが容易に掃除できるように、その敷居の端の一部を欠き取っていることである。当時(18世紀末期)としては、実に合理的というか、行き届いた手法といえよう。ご来園の際、是非ご一見いただきたい。

なお、敷居が境界を意味していることから、さまざまな民俗的な言い伝えがあります。その例をあげるならば、「敷居が高い」（不義理をしている）、「敷居を踏む」（親の頭を踏むのと同じ）、「敷居を枕にする」（幽霊が出る、親が病める）、「エナを敷居の下に埋める」（人によく踏まれると吉）等である。日本民家園では、これらにちなみ、民家へは敷居を踏むのではなく、またいで入っていただいている。



そろばん玉のついた敷居—旧菅原家

日本民家園収蔵資料紹介(7) ～ 火打石と火打金 ～

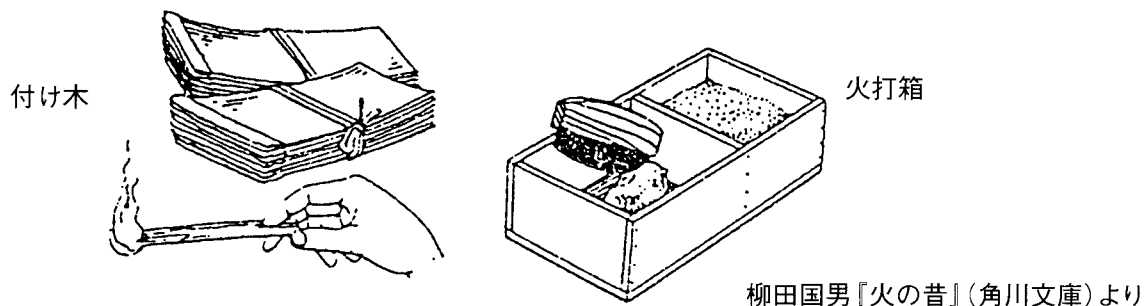
民家の生活にとって火は、炊事・暖房・照明・乾燥といった重要な役割を果たしていた。その火を作り出すことは、マッチが伝えられると容易になったが、それは明治時代になってからのこと。それ以前、特に日本民家園に移築復原した江戸時代の民家においては、マッチなるものは存在しなかった。それではどのような方法で火を作っていたかという、火打石と火打金が使用されていた。京・大坂ではヒウチガネ、江戸ではヒウチガマと呼ばれているものである。

火打金には鉄片を用い、火打石は石英類の硬い石、メノウ・水晶等も使用している。火打金を火打石に打ちつけ、その衝撃によって火花をださせる方法である。硬い石でたたかれた鉄から微小な鉄粉が飛び散り、空気と接することによって熱で燃え、いわゆる火花を発生する。その火花を火口で受けとめ、火種を得るという方法である。火口の材料には、枯れ朽ちた木の消し炭や猿の腰掛けと呼ぶキノコ、麻・ガマ・イチビなどの茎の消し炭の粉末を用いている。

火口の火種に、先端に硫黄を塗った「付け木」を当てると炎をたてて燃え上がる。この付け木が一般に普及していない時には、枯れ松葉・藁のはかま・かんなくずといった乾草・乾葉・木や竹の削り屑などの燃えやすいものに吹きつけて炎をたたせていた。これら火を作る一式は、家庭では火打箱にまとめて保管されていた。この箱の監督者は、柳田国男『火の昔』によると、主人の役割であったという。

付け木やマッチは貴重なものであったので、贈り物をもらったときのお返しに、重箱や風呂敷の中に入れるという風習が大正末年ごろまで広く見られていた。また人が外出するときに、「切り火」といってその背から火打の火花を打ちかけて魔払いをしている。かつて火は神の賜として神聖視されていたことを表す事象でもあるという。

(学芸員 小坂 広志)



平成13年度日本民家園入園者数について

| 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 合計 |
|-------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 8,545 | 10,797 | 6,767 | 3,993 | 4,475 | 6,798 | 10,629 | 13,499 | 4,461 | 6,275 | 7,860 | 7,850 | 91,949 |

平成13年度日本民家園の入園者数は91,949人で、平成12年度の入園者数と比較しますと1,063人の減少でした。昨年度は入園料の改定を行い、小学生・中学生については市内・市外を問わず入園料は無料となりました。また、ここ数年の傾向としては、65歳以上の入園者の数が多くなりつつあります。